

令和元年6月18日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370853

研究課題名(和文)「ホロコースト」後のアメリカ優生学運動と冷戦期政治文化の史的考察

研究課題名(英文) American Eugenics Movement during the post-Holocaust era

研究代表者

貴堂 嘉之(Kido, Yoshiyuki)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：70262095

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：第二次世界大戦後のアメリカ優生学運動とその海外への伝播・発展過程を検証する本科研課題では、重点研究領域として、(1)ドイツの戦後処理とアメリカの関係、(2)アメリカ1:「帝国」領域における優生学的実践(プエルトリコ、グアム、フィリピン)、(3)アメリカ2:「帝国」領域における優生学的実践(日本(沖縄含む)、韓国、東南アジア、アフリカ)、(4)戦後アメリカ国内における断種実践、黒人貧困層を対象とした南部社会における福祉施策、の4つを設定して、実証的な研究を遂行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後のアメリカ優生学運動とその海外への伝播・発展過程については、これまでほとんどまとまった先行研究もなかったが、5年間の研究期間に、新史料の発掘を含めて、全体像を描く手がかりとなる史資料を収集することができたことが学術上の大きな成果である。すべての史資料の解析にはまだ時間がかかるが、アメリカ優生学運動の通史を書くことを目標に、今後もこの課題に取り組みたい。また、近年、日本でも旧優生保護法下での強制不妊手術の実態が明らかにされつつあり、その前例としてのアメリカ社会における優生学的断種に注目が集まりつつあることにも付言しておきたい。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project was to analyze how the American eugenics movement developed after the World War II. Especially this project puts an emphasis on four topics; 1st is the relationship between the post-war Germany and the US. 2nd is the survey of eugenical sterilization in Puerto Rico, Guam and Philippines. 3rd is to analysis on sterilization in Japan. 4th is sterilization and welfare for African american in the South.

研究分野：歴史学

キーワード：優生学運動 断種 人種 ホロコースト

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の問題意識は、基盤研究(C)「アメリカ優生学運動の世界史的考察」(平成22-25年)の以下の二つの成果の延長線上にある。第一に米本昌平ほか『優生学と人間社会 生命科学の世紀はどこへ向かうのか』(2000)が提起した「ナチズム=優生学」の等式を崩し、優生学発祥の地イギリスとドイツを架橋する存在としてアメリカ合衆国の優生学運動に着目し、その地域別特徴(東部・西部・中西部・南部)と時代別(萌芽期[19世紀末~20世紀初頭]、発展期[1910年代~1920年代]、成熟期[1920年代~1934年頃]、変質・衰退期[1934年頃~戦後初期])整理を行って、「共時的近代」のなかで優生学運動の国境横断的なトランスナショナルな性格について明らかにしたこと。第二に、二つの世界大戦が優生学運動に与えたインパクトを解明し、特に第二次世界大戦についてはナチス政権の政策への支持を巡りアメリカの優生学諸団体が内紛をおこし、優生学団体が解体し遺伝学機関へとシフトする大きな契機となったことを明らかにした。だが、アメリカを含む国際的な優生学運動の展開とその広域秩序形成のありさまや具体的な科学者ネットワークを分析してみると、優生学運動はナチズムを終結点として終焉したのでは決してなく、実際には戦勝国アメリカの冷戦政策のなかで生き延びたことがわかった。国内では1960年代まで優生学的断種は継続し、対外的には戦前に優生学者として活躍した人々が国際家族計画連盟などを設立して、そうした国際的な組織を基点にアジア・アフリカへとパースコントロール運動を広め、出産や家族の領域へと直接的に介入する政策を拡大するようになっていた。以上のような論点整理から、あらためてアメリカ優生学運動の影響力を戦後世界において検証し直し、戦前から戦後への運動の連続性を浮かび上がらせていくことがきわめて重要であるとの認識にいたった。

### 2. 研究の目的

平成26年度から5年計画で行う基盤研究(C)「ホロコースト」後のアメリカ優生学運動と冷戦期政治文化の史的考察は、平成22年度~25年度に実施した基盤研究(C)「アメリカ優生学運動の世界史的考察」の発展課題である。これまでの研究では1920年代に運動が隆盛し、30年代中葉のナチス台頭を機に運動が衰退していく様を検証した。しかし、実際には第二次世界大戦のホロコーストの経験を経てなおアメリカ優生学運動は消滅することなく、むしろ戦後になって優生思想はアメリカ社会へと深く浸透し、冷戦期のアメリカの国際戦略と一体となりアジア・アフリカ向けの家族計画や産児調節政策として輸出されていた。そこで、本課題では、アメリカ優生学運動の第二次世界大戦後の展開に焦点をあて、これが「ホロコースト」の記憶の政治といかに関わったのか、冷戦下のアメリカ帝国領域内での優生学的実践と冷戦期政治文化の形成を考察する。

### 3. 研究の方法

第二次世界大戦後のアメリカ優生学運動とその海外への伝播・発展過程を検証する本科研課題では、重点研究領域として、ドイツの戦後処理とアメリカの関係、アメリカ「帝国」領域における優生学的実践1(プエルトリコ、グアム、フィリピン)、アメリカ「帝国」領域における優生学的実践2(日本(沖縄含む)、韓国、東南アジア、アフリカ)、戦後アメリカ国内における断種実践、黒人貧困層を対象とした南部社会における福祉施策を設定した。この4つの重点研究領域を4年間かけて研究し、最後の一年間で総括することとした。

研究の方法としては、各重点研究領域の先行研究の到達点をまずは把握し、関連資料を収集し、そのために必要な場合は海外の文書館、大学図書館を訪問した。また、国内外の研究者とも積極的に研究交流の機会を設けた。

### 4. 研究成果

(1) 計画初年度にあたる平成26年度は、ドイツの戦後処理とアメリカとの関係を重点研究対象とし、1)ニュルンベルク裁判等での優生学・医学(安楽死)の扱いや、2)戦後のカイザー・ヴィルヘルム研究所の組織改編と米軍統治・アメリカ人科学者との関係、3)中東戦争以後のアメリカにおける「ホロコースト」の記録の管理、を中心に研究資料を収集・分析し、研究を推し進めた。戦後70年を前に、ドイツやアメリカでもニュルンベルク裁判関連の資料や研究書が刊行され、戦後初期の米独関係についても、CIA関連文書をもとに旧ナチ・エリートをアメリカが積極的にリクルートした実態が明らかにされるなど研究史上の大きな進展もあった。こうした資料・研究書をもとに、戦後初期の米独関係、冷戦期文化の検証を行った。こうして研究が計画通り進展した一方で、平成26年度に計画していたポーランドのアウシュビッツ=ビルケナウ強制収容所の訪問調査は、学務の関係で日程調整が厳しく平成27年度以降に延期することとした。

(2) 計画2年目にあたる平成27年度は、上記のアメリカ「帝国」領域における優生学的実践1を研究対象として、1)プエルトリコについては、Laura Briggs, *Reproducing Empire: Race, Sex, Science, and U.S. Imperialism in Puerto Rico* (2002)で用いられた一次史料を中心に集め、プエルトリコでの断種実践を論じた研究論文等も集めた。2)グアムについては、管見の限り、断種実践についての研究はなく、今後もグアム以外の太平洋島嶼部を含め事例収集につとめることにした。3)フィリピンについてはアメリカの影響を受けた医療分野の歴史全般の資料収集に務め、医学の学知の相互連関をみるトランス・ナショナル・ヒストリーの研究分野から、関連

研究を収集・分析し、研究を進めることができた。こうした資料収集を中心に研究が計画通り進展した一方で、平成 27 年度に計画していた海外調査は、本務校の学務の関係で日程調整が難しく、平成 28 年以降に延期することとした。

(3) 計画 3 年目にあたる平成 28 年度は、上記 のアメリカ「帝国」領域における優生学的実践 2 を研究対象として作業を進めた。1) 日本の優生保護法制定や GHQ 占領下の性政策についての基礎文献の収集につとめるとともに、沖縄については GHQ 占領下で優生保護法が適用されないなかでの沖縄の生殖の歴史を描いた『戦後沖縄の生殖をめぐるポリテクス-米軍統治下の出生力転換と女たちの交渉』の著者、澤田佳世氏と研究交流の機会を持った。2) 韓国や東南アジアについては、基礎的な史資料の収集につとめた。3) 冷戦下のアメリカの生殖政策の第三世界への輸出に関して、アフリカを含むグローバル・ヒストリーの文献の収集につとめ、研究を進めることができた。また、平成 27 年度は計画していた海外調査を延期していたが、平成 28 年度はニューヨークにて史料収集する機会をえた。そこでは平成 27 年度の研究対象であった、プエルトリコやグアムに関する生殖・医療関係の一次史料をも収集することができた。また、アメリカにあるホロコースト博物館としてまだ訪問していなかった Museum of Jewish Heritage-a living Memorial to the Holocaust を見学し、学芸員の方々と交流することができた。

(4) 計画 4 年目にあたる平成 29 年度は、上記 戦後アメリカ国内における断種実践、黒人貧困層を対象とした南部社会における福祉施策を研究対象として作業を進めた。1) アメリカの戦後社会の優生学運動と福祉権をめぐる基礎文献、南部黒人の医療に関する社会学分野の研究の収集につとめた。2) Edwin Black, *War against the Weak: Eugenics and America's Campaign to Create a Master Race*, Expanded Edition (2012) 増補版で用いられているアメリカの優生断種に関する史料を、3 月のアメリカ調査にて、コロンビア大学図書館およびニューヨーク公立図書館にて収集した。3) 平成 28 年度に実施したアメリカ「帝国」領域における優生学実践の事例ともいえる日本のケースで、戦後の優生保護法のもとで強制断種(不妊手術)を一万件以上実施していたことが明らかになったことから、このテーマの新聞報道の整理や論文の収集も行った。

(5) 最終年度にあたる平成 30 年度は、これまでの 4 年間の研究成果を総括することに取り組み、また、3 月にはワシントンの議会図書館、国立公文書館、ホロコースト記念博物館アーカイブ等で、さらなる史資料の収集およびデータ収集を行った。本科研課題の中心テーマであるアメリカの優生断種の実践がいかに社会に根深く広まり、国境を超えて拡散していたかについて新史料を入手し検証する道筋がつけられたことが最大の成果である。本課題の成果刊行の第一弾としては、Edwin Black, *War against the Weak: Eugenics and America's Campaign to Create a Master Race*, Expanded Edition (2012) 増補版を 2019 年度に人文書院から刊行することが決定した。訳業以外にも、日本語でのアメリカ優生学運動のグローバル・ヒストリーに関する成果刊行を目指していく。また、今後の課題として残ったのは、日本での旧優生保護法下における強制不妊手術の実態が科研に取り組んだ 5 年間のうちに続々と明らかになり、日本現代史やジェンダー史の重要なテーマになったことから、これらのさらなる研究調査が必須のものとなった。日本史 研究者との共同研究を含めて、この日本での展開が、20 世紀初頭以来の米国の優生断種実践の系譜、GHQ 占領下の米国の政策立案といかに関わっていたのかは、次なる課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. 貴堂嘉之「政治風刺画家トマス・ナストのライフヒストリー」『立教アメリカン・スタディーズ』 通巻 37 号, 55-80, 立教大学アメリカ研究所, 2015, 査読なし
2. 貴堂嘉之「移民国家アメリカの優生学運動 - 選び捨てるの論理をめぐる - 」『歴史評論』 2015 年 4 月号, 28-39, 歴史科学協議会, 2015, 査読なし

### 〔学会発表〕(計 13 件)

1. 貴堂嘉之「「移民国家」アメリカという歴史の教訓」ILO 協議会海外社会労働事情研究会, 2019.
2. 貴堂嘉之「奴隷制における「近代」とは何か-アメリカ合衆国の奴隷制研究史を中心に-」, 第 116 回史学会大会公開シンポジウム「「奴隷」と隷属の世界史」2018.
3. 貴堂嘉之「合評会 兼子歩・貴堂嘉之編『「ヘイト」の時代のアメリカ史-人種・民族・国籍を考える-』(彩流社, 2017) 編者として本書の紹介」日本アメリカ史学会, 2017.
4. 貴堂嘉之「人の移動史からみたアメリカ合衆国の「帝国」論-黒人奴隷史と移民国家アメリカの歴史をつなぐ-」帝国史研究会, 2017.
5. 貴堂嘉之「軍事化とジェンダーの視点から(コメント)」, ジェンダー史学会シンポジウム「ポスト「戦後 70 年」とジェンダー史-地域のジェンダー実践を思考の手がかりに-」, 2016.
6. 貴堂嘉之「アメリカ社会は分裂するのか?-オバマのアメリカ、トランプのアメリカ」オ案等学院大学経済学会主催, 2016.
7. 貴堂嘉之「「制度」のなかの LGBT-教育・結婚・軍隊-(趣旨説明、司会)」, ジェンダー史学会, 2015.
8. 貴堂嘉之「ヘイトクライムとアメリカ(司会&討論者)」, アメリカ学会第 49 回年次大会, 2015.

9. 貴堂嘉之「高校歴史教科書における アメリカ合衆国 人種・エスニシティ、人の移動史を中心に」, 立教大学文学部主催 公開シンポジウム「高校世界史教科書記述・再考 研究者の視点から」, 2015.
10. 貴堂嘉之・「コメント「第一部：環太平洋における日本帝国という経験」, 環太平洋をつなぐエイジェンシー -人、物、知の循環-」, 2014.
11. 貴堂嘉之「トマス・ナストの風刺画の世界-サンタクロースとアメリカ大統領をつくる-」, 立教大学アメリカ研究所「アメリカの社会とポピュラーカルチャー」研究会, 2014.
12. 貴堂嘉之「討論者 自由論題D カリフォルニア・ハワイ・アジア系」, アメリカ学会第48回年次大会, 2014.
13. 貴堂嘉之「討論者「学問を変える」」日本学術会議学術フォーラム「男女共同参画は学問を変えるか?」2014.

〔図書〕(計9件)

1. 貴堂嘉之, 岩波新書『移民国家アメリカの歴史』2018, 235
2. 長谷川修一・小澤実編、長谷川修一、小澤実、中澤達哉、貴堂嘉之、森本一夫、上田信、松岡昌和、大西信行、茨木智志、新保良明、奈須恵子、矢部正明、勁草書房『歴史学者と読む高校世界史-教科書記述の舞台裏-』(共著)2018, 261(69-83)
3. 佐藤文香・伊藤るり編、人文書院『ジェンダー研究を継承する』(共著)2017, 522(226-233)
4. 歴史学研究会編、績文堂出版『現代歴史学の成果と課題第一巻:新自由主義時代の歴史学』(共著)2017, 303(64-78)
5. 兼子歩、貴堂嘉之編、彩流社『「ヘイト」の時代のアメリカ史-人種・民族・国籍を考える-』(編著)2017, 292(64-78)
6. 羽田正編、ミネルヴァ書房『ミネルヴァ世界史叢書1 地域史と世界史』(共著)2016, 315(268-290)
7. 南塚信吾、秋田茂、高澤紀恵編、ミネルヴァ書房『新しく学ぶ西洋の歴史-アジアから考える』(共著)2016, 397(181-182, 209-210)
8. 歴史学研究会、日本史研究会編、岩波書店『「慰安婦」問題を/から考える-軍事性暴力と日常世界-』(共著)2014, 257(153-158)
9. 和田光弘編、ミネルヴァ書房『大学で学ぶアメリカ史』(共著)2014, 329(115-138)

〔その他〕

ホームページ等 貴堂研究室ホームページ

<http://www.soc.hit-u.ac.jp/~kido/index.html>

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。